

須磨源氏

世阿弥作

季は	地は	後	前
三月	摂津	ワキ 前に同じ	ワキ 藤原興範
		シテ 光源氏	シテ 樵の翁

「八重の汐路の旅の空。／＼。九重何くなるらん。

詞

「抑是は日向の国宮崎の社官。藤原の興範とは我事なり。さても我鄙の住居なるに依つて。未だ伊勢太神宮へ参らず候ふ程に。此度思ひ立ち。伊勢參宮と志して候。

道行

「旅衣。思ひ立ちぬる朝霞。／＼。弥生の空も半にて。日影のどかに行く舟の。浦々過ぎてはる／＼と。波の淡路をよそに見て。須磨の浦にも着きに

けり。／＼。

詞

「やう／＼急ぎ候ふ程に。津の国須磨の浦に着きて候。此所は聞き及びたる源氏の大将住み給ひし在所にて候。又承り及びたる若木の桜をも一見せばやと思ひ候。

シテ一聲

「浮世のわざにこりずまの。猶こり果てぬ塩木かな。

松ならで又煙と見ゆる。是や真柴の陰ならん。

サシ 「是は須磨の浦に旦暮に釣を垂れ。焼かぬ間は塩木

を運び。浮世を渡る者にて候ふなり。

詞

「又此須磨の山陰に一本の花の候。名におふ若木の桜なるべし。古へ光る源氏の御旧跡も。此所にて有りげに候。

下歌
「我等賤しき身なれども。有りし雨夜の物語。

上歌
「聞くにも袖をうるほして。く。山の薪の重きにも。思ひ檣を折りそへて。彼古墳ぞとゆふ花の。手向の梢折々に。心を運ぶばかりなり。

詞
「暫く柴を下し花をも詠めばやと思ひ候。

ワキ詞
「いかに是なる翁に尋ぬべき事の候。

シテ詞
「何事にて候ふぞ。

ワキ
「其身は賤しき山賤なれども。此花に詠め入り家路を忘れたる氣色なり。若し此花は故ある木にて候ふか。

シテ
「賤しき山賤と承り候へども。恐れながらそなたをこそ鄙人とは見奉りて候へ。さすがに須磨の若木

の桜を。名木かとの御尋ねは。事新らしうこそ候へとよ。

ワキ 「げにく須磨の山桜。名におふ若木の花ぞとて。はるぐこゝに分け入りて。

シテ 「わざと詠めの御心ざし。

ワキ 「日もはや暮れて須磨の浦の。

シテ 「さらば里にもお泊りなくて。

ワキ 「野を分け山に。

シテ 「来り給ふは。

地 「関よりも。花にとまるか須磨の浦。く。近き

後の山里の。柴と云ふ物まで。名をとりぐのわざなるに。只心なき住居とて。人な賤しめ給ひそよ。人な賤しめ給ひそ。

「いかに翁。古へ此所は光る源氏の御旧跡。ことに御事は年ふりたる者なれば。源氏の御事物語り候へ。

「忘れて過ぎし古へを。語らば袂やしをれなん。我空蟬の空しき世を案ずるに。桐壺の夕べの煙。絶えぬ思ひの涙をそへ。

サシ
「いとゞしく虫の音しげき浅茅生の。

地
「露けき宿に明け暮らし。小萩が本のさびしさまで。はごくみ給ひし御恵み。いとも畏き勅により。十二にて初冠。高麗国の相人の。附けたりし始めより。光る源氏と名を呼ばる。筍木の巻に中将。

紅葉の賀の巻に。正三位に叙せられ。花の宴の春の夜の。行方も知らずに入る月の。おぼろけならぬ契り故。年廿五と申せしに。津の国須磨の浦。海士人の歎きを身に積みて。つぎの春。播磨の明石の浦づたひ。問はず語りの夢をさへ。現に語る人なし。去る程に。天下に奇特の告有りしかば。又都にめしかへされ。数の外の官を経て。

シテ
「其後うちつゞき。

地「澪標に内大臣。乙女の巻に太政大臣。藤の裏葉に太上天皇。かく楽しみを極めて。光る君とは申すなり。

ロンギ地「さてや源氏の旧跡の。分きて何くの程やらん。委しく教へ給へや。

シテ「何くとも。いさ白波のこゝもとは。皆其あとゝ夕暮の。月の夜を待ち給ふべし。もしや奇特を御覧ぜん。

地「そもそもや奇特を見んぞとは。何をか待たん月影の。シテ「光る源氏の御住家。

地「昔は須磨。

シテ「今は都卒の。

地「天に住み給へば。月宮の影に天くだり。此海に影向有るべし。かやうに申す翁も。其品々の物語。源氏の巻の名なれや。雲隠れしてぞ失せにける。雲隠れして失せにけり。(中入)

「さては源氏の大将かりに人間と現じ。我に言葉を
かはし給ふか。いざや今宵はこゝに居て。猶も奇
特を拝まんと。

歌
「須磨の浦。野山の月に旅寐して。く。心をすま
す磯枕。波にたぐへて音楽の。聞ゆる声ぞ有難き。
く。

後ジテ
「あら面白の海原やな。我婆婆に有りし時は。光る
源氏といはれ。今は都卒にかへり。天上の住居な

れども。月に詠じて闇浮にくだり。所も須磨の浦
なれば。青海波の遊舞楽に。引かれて月の夜汐の
波。かへすなる。波の花ちる白衣の袖。

地
「玉の笛の音声澄みわたる。

シテ
「笙笛琴笙篋孤雲のひゞき。

地
「天もうつるや須磨の浦の。荒海の波風しんく
り。

ロング地
「雲となり雨となり。夢現とも分かざるに。天より

光りさす。御影の内にあらたなる。童男來り給ふ
ぞや。さては名にしおふ。光る源氏の尊靈か。

シテ
「其名もよそに白浪の。こゝもとは我住家。猶も他

生を助けんと。都卒天より。二度こゝに天くだる。

地
「あら有難の御事や。所は須磨の浦なれば。

シテ
「四方の嵐も吹き落ちて。

地
「薄雲かゝる。

シテ
「春の空。

地
「ほんじやくしわうの人天に。下り給ふかと覚えた
り。所から山賤へきらといはれし。ゆるし色の綺
羅なるに。青鈍の狩衣たをやかに召されて。須磨
の嵐に翻し。袂も青き海の波。颯々の鈴も駅路の。
夜は山よりや明けぬらん。く。